

## 2005 年度 森村・川村ゼミ議事録

10 月 26 日分

記入者: 深井麻希子

司会者: 小椋なつき

文献: “Fluxus Experience” 1~3章 まとめ

### 発表グループ

①(岩永・豊島・山田)②(武道・鯨井・豊島・小椋)③(藤村・元島・深井)

### 議題

1. 各グループ(章)の発表まとめとそれに対して
2. フルクサスの効き目は切れているか、切れていないか
3. フルクサスとは何だったのか
4. 3回に渡る発表を通してフルクサスから何を得たのか など…

#### 1. 各グループ(章)のまとめとそれに対して

グループ①: 当時の人や社会がフルクサスをどう受け止めていたのか、具体的にフルクサスが今の私たちに何を与えてくれるのか、フルクサスを芸術と捉えたときどうなのか。以上の疑問を検証しながら、フルクサスは個々の感覚を目覚めさせてくれる、primary experience が全てとなる、芸術と捉えたときフルクサスはアートではなくギャグでしかないという見解を見出した。

グループ②: フルクサスを外から評価してみた。時代背景との関係があるため、当時持ちえた力は今において現存しないという見解を見出した。=「使用期限は切れている」なぜなら、マチューナスが芸術制度・ブルジョア階級に対して浄化しようとした点からフルクサスを捉えることができるから。そのため、今においてその浄化効力は持ち得ない。

グループ③: フルクサス周辺で起こっていた3つの芸術の動きとの関係性を見ていくことで、客観的にフルクサスを見てみた。作品が日用品を扱い、日常に隠れている五感覚を呼び覚ますものであるため、「日常」というテーマがフルクサスの正体に迫る重要要素となる。「日常」を扱っているため、今においてもその精神は存在しているといえるという見解を見出した。その意味では、「使用期限は切れていない」

グループ①に対して、受け取る側だけではなく、フルクサス内のアーティスト自身がどう捉えたかをみてゆくとさらに分かることがあったのではないかな…

グループ②に対して、「使用期限が切れている」理由は当時の社会背景だけなのか…

グループ③に対して、「日常」=フルクサスというのはどうなのか…

## 2. フルクサスの効き目は切れているか、切れていないか

・今効き目がない理由として、今の美術館の在り方やアートに対する意識を考えてみる「あきらめ精神」があるからではないか →別に現状に対して何かアクションを起こそうとはしない。それが当時とは違う点なのではないか。

・今の美術館をハイクラスのものとは思わない⇒でも、やっぱり美術館は都心に集中している

・日本と西洋の違い 日本…個人所蔵があまりみられない 西洋…個人所蔵が多くみられる日本に比べて西洋のほうが、「もっと開放したらよいのではないか」という意識が強いのでは。

・美術館に行く人と行かない人の意識の差は何なのか？なぜ行かないかは趣味の問題？美術館に興味がない、行かない人を対象に、商品を通して触れさせる機会が見受けられる。

## 3. フルクサスとは何だったのか

・フルクサスは大衆を意識するのではなく、個人ベースの感覚を扱っている。

・個々の五感、経験を呼び覚ますことを与えてくれた

・プレコンセプチュアルアートなのか？コンセプチュアルアートがいき過ぎたかたちなのか？

フルクサスはコンセプチュアルアートの先駆けとなり、盛り上げてくれたものである。

・ISM や様式ではない。ただのグループだった(アートかギャグか、前衛かと捉えるものではない)

・マチューナスが何者であったのか考えることで分かることがあるのではないか。

彼自身は大した芸術家ではない。極めてコーディネータ的存在。フルクサスというグループを組織化した人である。個々の人間関係をみていったものであった。

→ ただの集団・グループであったのに過ぎない。

## 4. 3回に渡る発表を通してフルクサスから何を学んだのか

時間上話し合うことはできなかったが、今後の議論に活かせる、議論方法を得ることができた

☆得たことは個人個人でまとめておき、今後の研究に役立てよう☆

・皆で統一したフルクサス見解を得て、さらに個々の見解の位置づけを確認した上で議論を進めるとより良い議論ができたのではないか。

・各は発表グループが議論の展開を意識して、問いの立て方をもっと考えて行うべきだった。

・「一転突破」 → もっと個々に迫っていても良かったのではないか。個々の縦や横のつながりから全体がみえてくる方法もある。

## 記入者の考察

3回の発表を通してフルクサスをみてきた。その言葉が示すように「流動」的で捉え難いものであったが、3つのアプローチからその正体に迫ることができたのではないかと思う。

今回の総括で、私が一番印象に残ったのは、フルクサスは「アートか？」というのではなく、それ以前に「ただのグループであった」という意見が出てきたことであった。毎回発表では、「フルクサスはアートか？」という疑問ばかりが意識され、私たちの本来の目的であるフルクサスの理解が狭い範囲でしかできなくなっていたのではないだろうかと思われかされた。

そう考えつつも、フルクサスを通して私が得たこととして、自分にとって「アートとは何か？」ということに再考するきっかけを与えてくれたことは確かである。私にとってアートとは、日常の中での発見や刺激を与えてくれるものである。全ては自分に委ねられているものであり、今まで隠れていた、あるいはなかった感覚や感情をひょいと見えるかたちで表して教えてくれるものだ。それはごくごく些細なことで、どんなに素晴らしい技法が使われているか、歴史的に貴重かどうかなどといったことは全く関係ない。こうした私のアートに対する考えを、その通りに自由に伸び伸びと実行してくれた集団、それがフルクサスなのではないだろうかと思った。

また今回、分からなかった点や燃焼しきれなかった議論点を解消しようとした。しかし、皆で統一して持つべきフルクサスの見解を確認した上で進められなかったため、議論まで持っていくことがなかなかできなかった。この反省は今後活かしていきたいものである。